



No. 127

ティーブレイク

Tea Break

メタモルフォーゼ

子供の頃によく見たものに「仮面ライダー」や「ウルトラマン」などがあるが、何かにつけ、よく変身する。その外観上の変身もさることながら、変身した本人それ自身は、そこから見た周囲の景色に変化が生じるものなのかどうか、子供ながらにそれなりに考えたことがある。

ところで、やはり子供の頃に聴いた音楽に『グリーン・グリーン』という曲がある。これは確か、詩の内容それ自体はそんなに楽しいものではなかったが、曲自体はなぜか短調ではなく、長調であった。そして非常にリズムがよく、軽快で、多くの子供たちが楽しみながら歌っていた。

この歌の中では、ある日少年は、この世に生きる喜びと悲しみのことを自分の父親から聞かされることになるのだが、当の父親はそのままどこかへ旅立ってしまう。そのとき少年は、その父親が二度と帰ってこないということを自ら悟っている。こうした悲しい歌であるにもかかわらず、歌は短調ではなく長調であり、多くの少年や少女が、軽快に口ずさんでいた。

こうして大人になってみると、そういえばあのお父さんは本当はどこに行ってしまったのだろうというような下世話なことも考えるのだけれども、グリーン・グリーンはやはり、子供の歌である。その少年はきっと、父親がいなくなってそれから、絶望などすることなく、明日に向かって生きるのであろう。子供の目から見た歌な

のであるから、そんな一種の明るい希望のようなものが確かにあった。

けれども、今こうして『グリーン・グリーン』の詩曲を思い出す自分は、もう大人である。だから今は、二度と会えないことがわかっている状態で、旅に出なければならぬ父親の気持ちというのを思ってみると、それは言葉で言い尽くせないものがある。子供と二人でこの世に生きる喜びと悲しみのことを語り合ったからといって、それでどうなるものでもない。ただそうせざるには居れなかつただけのことであろう。

ただ悲しいことに、子供にはそのことが的確にはわからない。自分も、あるとき手術室に入って行く母親がなぜ自分の手をいつまでも握って離さなかったのか、そのときはそれなりに理解していたつもりではあったが、今となってみればそれが不十分なのは明らかである。

成長するというのは、外観的な変化だけではない。変化した本人から見た周囲の景色にも変化が生じる。『グリーン・グリーン』は、もしこれを大人の立場から書いたのであれば、この歌は長調ではなく、確実に短調になっていたのであろうと、そう思うのである。

(正)